

●外交時評

華国鋒体制の安定性

中嶋嶺雄 (東京外国語大学助教授)



文化大革命以来の十年間、中国の政治にはあまりにも無理が多かった。そしてその無理を強行してきたのがいわゆる文革派のリーダーたちであり、とくに江青夫人の恣意(しい)が政治に投影されてきたことは明白であっただけに、彼女にたいする憎悪や怨恨(えんこん)からしても、毛沢東主席なきあとの文革派上海グループの命運には、多くの不安があった。

私はこれらの点について、文化大革命が中国社会の内部に根をおろしてはおらず、文革派のかまびすしい政治言論が、単に表層のプロパガンダとしてしか大衆に聴きいれられていないこととともに、これまでも繰り返してきつたつもりである。毛沢東の死にさいしても、「毛沢東体制は解体する」(「朝日ジャーナル」七六年九月二十四日号)、「毛沢東時代への訣別」(「諸君」七六年十一月号)などのテーマで書いてきたゆえんである。

だがそれにしても、事態はあまりにも早く現実と化し、そのありさまはあまりにも酷烈であ

った。こうして江青夫人ら「四人組」は、毛沢東体制の絶頂からいっきよに失墜し、いまや最大の「妖魔」として八億民衆の公敵となつてしまったのである。

事態がこのようになってみると、思い起こされるのは去る四月の天安門事件であり、そこにあらわれた江青、姚文元らへの激しい批判の噴出と、「四つの現代化なりし日には、われら祝宴を設けて飲みあかささん」とうたった「反革命分子」の詩であろう。

(天安門事件について詳しくは「中央公論」七六年九月号所載の拙稿「再構成・天安門事件参照」)

江青夫人ら「四人組」が失墜し、「工業、農業、国防、科学技術の現代化」という「四つの現代化」路線が、私の予想した通りいまや全国的に復活した(十月二十五日付「人民日報」)「紅旗」「解放軍報」三紙誌共同社説「偉大な歴史的勝利」今日、事態の転回がきわめて急速であることが認められると同時に、いまや「反革命分子」が完全に勝利したとみなしてよいであろう。

う。

このような状況のなかで、「四人組」処断を実行し、みずから党主席兼首相という類例のない地位についた、華国鋒新主席にたいする支持の雪崩現象が起こっている。そして、華国鋒主席は処断者を「四人組」に限定し、これまで彼らに近かつたと思われる人物(たとえば「四人組」の手兵ともみられていた首都工人民兵の責任者、倪志福党中央政治局候補委員)を「四人組」から切り離して味方につけるなど、はやくもその政治的手腕をみせはじめている。こうした事実、いづれも華国鋒主席の政治的地盤の拡大につながるであろう。

しかし、なんといっても、「四人組」という「主要矛盾」の排除にさいしては一致した党の長老幹部、人民解放軍および特務・公安関係者が、今後ひきつづき華国鋒主席を支持しつづけるかどうか最大のカギであろう。

この点では、李先念副首相をはじめ、実力派三軍人の陳錫聯(北京軍区司令)、許世友(広州軍区司令)、李德生(瀋陽軍区司令)らいづれも湖南省黄安県出身の「黄安グループ」が、葉劍英副主席兼国防相らとともに、周恩来・鄧小平系の実務派グループとして当面は華国鋒主席を支持するであろうし、特務・公安関係は華国鋒主席自身の手中にあるといつてよい。

しかも、党主席はきわめて集権的かつ絶対的

なポストであり、このようにみえてくると、華国鋒主席の基盤は意外に強いかもしれない。
しかし、「狡兎(こうと)死して良狗(りょく)煮らる」のことわざを、これまでその通りに繰り返してきた中国である。将来、反文化

大革命がさらにすすみ、非毛沢東化の課題が本格的なものになったとき、華国鋒主席自身が非上海グループの文革派であったという過去や、もしかすると毛沢東の血をついでいるかもしれないという当面のナゾの真偽が、ひよつとする

と彼の致命傷になるかもしれない。
◆——
華国鋒体制の安定性について、それを肯定するには、まだまだ時間を経なければならぬようである。

●十月の論壇から

毛死後の中国をめぐる活発な論議

鈴木幸寿 (東京外国語大学教授)

むずかしい中国情勢の判断

九月九日の毛沢東主席の死は、今年に入ってからに周恩来、朱徳という二人の要人の死に次ぐものであり、まさに中国の屋台骨を大きく揺るがしたといつてよいのであるが、「当然、中国はいざこへ」をめぐる活発な論議がなされてきたし、これが今後もかなり長期にわたって問題になっていくであろうことは予想される。

これは最近の新聞報道で知られているように、華国鋒主席就任をクーデターによって阻もうとした江青女史、王洪文、張春橋、姚文元らの策動が暴露され、毛主席の死後いくらかもたぬうちに展開された権力闘争のはげしさが、われわれの予想をはるかに超えるものであるという事実によって、ますます中国情勢の判断の困難さを示すこと

と軌を一にしている。

毛死去がもたらした波紋のひろがりや言論界にも数多くの影響を与え、総合誌はこぞって論稿をさまざまな角度からとりあげている(ただし『世界』はただ大江健三郎の「眼量を放げられよ—毛沢東の死によせて—」と岡田春夫社会党議員の「毛沢東主席の思い出」談話筆記の補筆の二つしか掲載していない。ロッキード事件のときも『世界』はすぐ問題に飛びつこうとしなかった)。これは毛沢東が単に偉大な革命政治家であったというだけでなく、哲学者あるいは文学者(詩人)といった側面ももち合わせていたためで、『展望』の竹内実、野村浩一の対談「毛沢東思想の遺産」、また同誌、富士正晴、司馬遼太郎の対談「毛沢東のいる風景」などはこのことを物語っている。

しかし何といつても、毛沢東の死が複雑な国際政治、ひいては国際経済などに与える影響のほうが強だけに、これらめぐる論議に焦点が集まっていたことは否定できない。しかも、このことは中国の国内情勢の変化によって決定されるだけに、予測や予断推測が入り乱れてくる可能性もついている。したがって、毛沢東個人の礼賛者もふくめて、ただ「巨星おつ」といった立場の論評だけでは、ことすまないのである。

的確、中嶋論文の指摘

こうしたなかで、毛死後約一カ月半にして起こった権力闘争の発生をある程度まで予測、予言して、びたりの射を射た論文として『諸君』の「毛沢東時代への訣別」(中嶋嶺雄)のもつ意義は大きい。

中嶋は、毛死去の報に接して直観的に思ったことの一つに、生前において毛が遺書ないし遺囑を残したかどうかであったという。毛も含めて中国では強大な指導者は遺書もしくは遺囑を残し、それが大きな意味をもつという政治文化を継承した歴史があり、具体的例として孫文の「革命いまだ成らず」という名文句以外に、ソ同盟にあてた遺書と宋慶齡夫人あての私的遺書を残した事実、しかもこれが国民党内部の対立抗争を激化した(陰では汪精衛が遺囑を改ざんしたとか、ソ同盟あての遺言が、実は当時の容共派の孫文の秘書陳友仁とコミンテルン顧問ポロージンの合作だといった疑惑が取りざたされていた)ことを挙げてゐる。

華国鋒の首席就任と江青夫人ら上海グループにかけられた疑惑、追放ののろしが上がったことと、次の中嶋の文言は見事に一致している。すなわち「ともかく、もしも遺言ないし遺囑の存在が認められるとしたら、当分はその方向において政治が動かざるを得ないであろう。だが、そこに新しい政治的摩擦が生じ、再び政治の亀裂が深まるならば、そのときには、遺言もしくは遺囑の真偽をめぐっても苛烈な党内闘争が展開されるかもしれない」。

さらに中嶋論文では、毛沢東の革命的功績者としての生涯にスポットを当てるだけではなく、むしろ、中国共産党創立時に果たした役割の過小評価に立ち、また「右寄り」の論文を発表した一九

二三年あたりの毛のとつた、いわば表向き伝記における空白期の問題、つづいて一九四九年、中国の建国以来二十七年間にわづか三回しか党大会を開かず、その間、多くの毛政治の犠牲者が出たという事実が、クレーターとは別に、毛なきあと江青夫人はじめ側近者に対して向けられる積年のおんねんとなって表面化しないとも限らないといった論調まで述べている。中国の新路線がどこに向けられるかについて全く予断を許さないほど流動的であるなかで、中嶋の指摘の正鵠(こう)さは、やはり現代中国研究家として卓抜であるといえそうである。

燃える人、毛沢東の側面も

中嶋のこうした観察に対して、中国古代史の第一人者である貝塚茂樹は『中央公論』の特集「毛・周を失った中国の新路線」のなかで「毛沢東の変身」を書き、一九五四年に中国に招かれ、建国五周年祝賀の国慶節の祭典に参列した昔話とともに、毛沢東個人のパーソナリティが漢の高祖にふしぎに類似点があることから、廬山会議での彭徳懷に対する仕打ち(一九五九年八月、反党集団とレッテルをはられ、肅正された事件)を引用して、火のように燃える感情家として毛沢東をとらえてゐるのは面白い。

中国革命の主である以上、その実行にいくたのエピソードがあるのは当然であるが、それを人物の評価素材にすることはいささか軽薄のそしりを

まぬがれないにせよ、貝塚のばあいは、権力闘争に明け暮れた革命の英雄像をたくみにとらえてゐるといってよい。

また別の観点からすれば、『文藝春秋』のマーク・ゲイン(アメリカのジャーナリスト)の「毛沢東の偉大と悲惨」も、毛に対する論評として出色かもしれない。毛沢東の指導による革命成功の秘密は、どうやら(1)農民を味方にしたこと、(2)民族主義に立つてマルクス主義の中国化をはかったこと、(3)永続革命論理による闘争状態の恒常的作出が、政権の相対的安定化をもたらしたこと——などを挙げることができそうである。

毛死後に予想される権力闘争は、急進派と穏健派の間で展開されるとみてはいるものの、もう一つ決め手を欠いている感じであるが……。

要求される厳正な分析

ところで、最後に開高健、橋川文三、萩原延寿のてい談「中国現代史と日本人」にふれて、毛沢東をめぐる論評のしめくりにしておきたい。

『中公』の特集では、このほかに竹内実の「革命第二代はどこへゆくか」、丁望(香港)「明報」副編集長兼「明報月刊」編集長の「評伝人民中国のプリンス王洪文」と鹿沢剛の「鍵を握る人民解放軍の内幕」などがある。王洪文評伝は、かれがわずか七年にして一介の労働者から中共中央副主席ナンバー・スリーの地位を得たというのは稀有(けう)のことであるだけに、興味深い読み物

に違いないが、政変劇の陰謀者としてすでに反党者とみられ、完全に失墜した事実を考えると、その辺にこそ中国のもつ特異性とともに、どこまでを真実と考えるべきかに迷わざるをえない面もある。しかし、この評伝の末尾には「王洪文は理論的水準が低く、党・政・軍の中に基盤をもっておらず、職務にふさわしい本当の人間望がない。政治的前途はおそらくあまり樂觀できないであろう」と結んでいるのが印象的であり、かつ政変劇とやらんで象徴的である。

さて「てい談」に戻るが、社会主義社会建設の常とう手段あるいは定石をふんでいないという意味で「西欧の射程外に出た」(萩原)という認識が、革命の永続化をひようぼうするハメになり、アナキズムと刻印されて、あまつさえ「反対派に言わせれば、乱世の雄にすぎない。乱世の雄としては巨木で賢くて辣(らつ)腕で見事だったけれども、平和の時代に統治できる人物じゃない」(開高)といった評価がなされているのが毛沢東の姿である。開高は作家らしくさらに「しよせん中国はまだ近代がない。それは推理小説がないから」ときめつけている。仮説とはいえ萩原も「革命家だつて休日がないわけにはいかないんだから、彼らもどこかで休日を作っているんじゃないか。それが毛沢東のばあいには詩であつたのかもしれない」と詩人毛沢東にケチをつけている。

橋川は橋川で「毛の指導したものは政治なのか、あるいは人間が生活するという文化なのか」

を問ひかけ、毛の本質探求のむずかしさを指摘している。

いづれにせよ、これだけの大国になり、米ソの冷戦二極構造に変化を与えるようになった中国体制の生みの親の死が、何物ももたらさないと考へられない以上、これまでのさまざま論評やこれから出てくるであろう観測、予想には事欠かないといえる。しかし、厳正な分析が要求されることも間違いない。いたずらに独断や偏見にまどわされないことも肝要であろう。

「保守政治の論理を断て」

さて、政局の混迷は自民党の内紛、総選挙間近という客観的条件のなかでその度合いを深めているが、内紛については「文春」のドキュメント「自民党権力抗争」(志村次郎)が目立つ程度で、それほど掘り下げた論考はみられない。

これはどうやら、自民党分裂を思わせる動きがあつたにもかかわらず、土壇場で收拾した(せざるをえなかつた?)ことによつて、しよせん内紛が決裂的狀況に至らないであろうという自民党の体質を認識すれば、成り行きにまかせてとくに問題はないということの意味しているためではないかと思われる。いわゆる挙党協の臨時党大会での出方も、ほぼ総選挙後における円満な政権の委譲劇がおこなわれることを前提として動いているふしもみられる。ただ、自民党の起死回生が、ロッキード問題との関連においてチャンスを見失われ

ることのないようにしなければ、保守体制の維持そのものは危殆(たい)にひんすることになるであろう。

こうした予想が成り立つことから、『世界』は特集「保守政治の論理を断て」を組んでいる。冠頭論文に「道義的批判から制度改革へ」(伊東光晴)がある。サブ・タイトルが「ロッキードの政治経済学」となっていることからあきらかなように、「ロッキード問題」がなげかけたものは何かを、経済の問題にしぼり、制度上どのような改革が最小限必要なのかを考えていく」という立場からの論文である。

元来、商取引に政治が介入しない(できない)のがタテマエではあるが、航空機の購入は一航空公司で金策がつくものではなく、当然、政府関係銀行からの融資を必要とする。

伊東はまず、ここに政治介入の余地が出てきて汚職につながることを挙げ、さらに、日本の企業とアメリカの企業との違いのなかで、アメリカの企業では、たとえ海外の政治献金であろうと、ひそかな販売促進費であろうと、あるいは裏金であろうと、その実態を明らかにせずにおかない監査制度がある点を指摘し、これが日本のばあい「監査される人が監査する人を雇う」という制度になっていることから、全く正反対であること、つまり制度的欠陥が、道義的批判にもましてロッキード事件では重要なこととあらうことを力説している。